

## ル・フォール文学における不信仰者について

濱中 久美子

## Von den Nicht-Gläubigen in le Forts Dichtung

Kumiko HAMANAKA

*Osaka University of Pharmaceutical Sciences, 4-20-1, Nasahara, Takatsuki, Osaka 569-1094, Japan*

(Received October 19, 2007; Accepted November 26, 2007)

In diesem Artikel behandle ich die Bedeutung der Nicht-Gläubigen in den Werken der christlichen Dichterin Gertrud von le Fort, deren Charaktere vielfältig sind. Le Fort handelt in ihren Werken von den beiden Typen der Menschheit, nämlich einerseits von den frommen Christen, wie den Klosterschwestern, den hohen Geistlichen und älteren Christinnen, und andererseits von den modernen antichristlichen Menschen. Die in ihren Werken auftretenden Christen glauben zwar an das Christentum, aber es ist nur nach ihrer bisherigen Gewohnheit oder ihrer eigenwilligen Auffassung. Le Fort hält diese Christen nicht für echt christlich. Nach le Forts Verständnis bedeutet der christliche Glaube nämlich folgendes: Die nur vom Menschenverstand bestimmten Eigenschaften total zu vernichten, nur den Gotteswillen zu verkörpern und in aller Welt das Evangelium wie die Liebe Gottes zu verkündigen. Die Auftretenden, seien es Christen oder Nichtchristen, geraten alle, indem sie danach streben, in qualvolle Zustände und erst am Ende erkennen sie in dieser Qual den Liebesruf Gottes, der die Menschen erlösen will. Dann werden sie sich der Gottesanwesenheit auf dieser Welt und des Gottesplanes bewusst, durch die alle Ereignisse eigentlich für die Erlösung der Menschheit gefügt werden. Durch diese Erlebnisse wird in ihnen der echte Glaube an Gott wach. Die ewig bleibende Liebe Gottes zu den Menschen ist das einzige Thema Gertrud von le Forts.

Le Fort meint weiterhin, dass selbst der angeblich Nicht-Gläubige, wenn er sich gemäß dem Gotteswillen bemühen würde, in Wirklichkeit wahrhaftig gläubig wird und konsequenterweise katholisch wird.

**Stichwörter**—Gertrud von le Fort, Christentum, Menschheit, Liebe, Qual

## はじめに

ル・フォールはしばしば、その作品の中で、古い文書に記録された伝承や事件と現代の出来事を比較し、過去と現代とを対比させるという手法を用いて、当該作品で扱われている問題を鮮やかに浮き彫りにする。そこにおいて浮かびあがるのは、過去の問題ではなく実は現代の抱える問題で

ある。そのことはたとえば、『断頭台下の最後の女』(Die Letzte am Schafott, 1931)が、第2次大戦へと向かうドイツの暗い時代の運命を作者が予感し、創作されたものであること<sup>1)</sup>、『無辜の子ら』(Die Unschuldigen, 1953)が扱った内容が、作品の発表前に話題になっていたドイツ軍による第2次大戦中のフランスのオラドゥール村民の虐殺事件に関する裁判を題材に採ったものであり、ドイ

ツ軍の責任を厳しく問うものであること、また『天国の門』(Am Tor des Himmels, 1954)がベルトルト・ブレヒト(Bertold Brecht, 1898 - 1956)が『ガリレイの生涯』(Leben des Galilei, 1942)のなかで述べた教会への批判に対するキリスト者からの応答として出版されたと思われることなどを見れば、明らかである。

神学者であり、ル・フォール文学の最初の批評書を上梓したテオデリッヒ・キャンプマン(Theoderich Kampmann)<sup>2)</sup>も当初から「我々の民族のカトリックの現代の若者たちは、注目に値するほど一致して、ル・フォールのなかに自分たちの詩人を認めた。…むしろ若者はかれらの詩人の世界と自分の世界との一致を体験する<sup>3)</sup>」と彼女の現代性が若者の共感を呼んだことを証言している。彼女の作品の特色は常に現代の焦眉の問題をキリスト者の目で見つめ、現代人の宗教への無関心や反発が問題の発生の源にあることを指摘し、宗教的な視点からの問題解決の可能性を問うていることであろう。それゆえ、彼女の作品では、キリスト教に対する不信者の無関心やキリスト教への反感や憎悪、そしてそれに対するキリスト教側の主人公の応答が、常にその主題となっている。この論攷では、この立場を異にする二者の対話において、一方の当事者である不信者をル・フォールがどのように扱っているかを検討していきたいと思う。その姿と行動の中にはル・フォールが現代人が抱える問題をいかに捉え、どのように解決しようとしているかが浮かび上がってくるからである。そしてそのことは必然的に、ル・フォールの属するカトリック教会の抱える問題をも浮き彫りにするものである。

## 1 不信者の種々の形態

彼女の作品には様々な種類の不信者の登場人物

が現れる。その中には敬虔なキリスト教徒、修道女のようなキリスト教の信仰者が多く含まれる。あるいは司祭や高位聖職者のような教会の代表者である人々も不信者の一人として扱われていることもある。その一方で、現代の反キリスト教的な科学者や教養ある知識人等もまた、不信者として登場する。下にいくつかの作品からそのような不信者たちを取り上げ、その問題点を挙げてみよう。

### 1-1 修道女の不信 その1)

不信者のうちでも、偉大な宗教的人物がその一例となるのは、『断頭台下の最後の女』の修練長マリ・ドゥ・ランカルナシオン童貞(Marie de l'Incarnation)である。彼女は主人公のブランシュ・ドゥ・ラ・フォルスが身体も小さく弱々しいうえに、心理的にも生まれながらに母から伝えられた不安を抱えているのに対して、一見して誰が見てもすばらしいと感嘆するような印象を人々に与える人であり、身長も高く、「剛毅な」(LS22) うえに、美しい燃えるような目を持ち (LS23)、王家の血を引き、出自も申し分ない。しかも自分が生まれる原因となった宮廷人の放縦な行為の罪過を償うという敬虔な気持ちから修道院に入ったもので、また信仰のためには死をも恐れぬ英雄的で、強い心の持ち主でもある。マリは「彼女は聖後の肖像画、いやそれどころか聖王の肖像画のモデルにもなれたでしょう」(LS21)といわれているほどである。そして信仰心の失われたフランス革命の時代に、断頭台で立派に殉教し、神の存在を不信な民衆に示したいと熱望している。しかし、運命のいたずらで、彼女がいないあいだに他の同僚は革命側の官憲に捉えられ殉教したが、それを切望していた当のマリの方は捕縛を免れ、教会からも殉教が赦されないまま、生きていかなければなら

2) Theoderich Kampmann : 1899 年生まれ。1935 年ル・フォールに関する最初の批評書を出版。その後も、ル・フォールの文学作品の批評的評価を続けた。1935 年パーデボルン哲学神学大学講師。1956 年ミュンヘン大学教授。

3) Theoderich Kampmann: *Gertrud von le Fort. Die Welt einer Dichterin*, München (Verlag Josef Kösel & Friedrich Pustet) 1935, S.7.

なくなった。彼女は「御托身のマリア」(人間になったマリア)という修道名が示すように、明らかに聖母マリアの類型として創作されている。実際、「彼女は悲哀の聖母のようなすがたでした」(LS78)と作品中でも描写されている。彼女は主人公ブランシュが神の命に従い、苦悩そのものと化して、人々に神の苦悩を身を持って示す存在となっている姿を目撃し、この世が神を失って、苦悩と不安と恐怖のなかにあることを悟り、それを自分の問題として受け入れ、厳しい運命に耐えつつ人生を生き続けることを選択する。それは「生きること死よりもつらい」(LS72)ことであり、彼女をかくまった女性は「マリ童貞様は、まるでつらい罪の償いでもなさるように、生活をおくっておられました」(LS73)と証言している。それでもなお殉教を望む彼女に、彼女の長上(上司)である司祭は「あなたの(同僚とともに処刑台に向かいつつ歌いたいと願うその)声までもお捧げなさい。——それを一番最後のもののためにお捧げなさい」(LS74)と命じたのである。そして、殉教しなければ神に見捨てられると嘆く彼女に対して、司祭はキリストが十字架にかかる前に体験した孤独と苦しみを思い、また愛する息子を失った聖母の苦しみに満ちた沈黙を思え、と諭す。このとき彼女の抵抗は砕け散り、殉教へのすべての希望は断たれるのである。このときから「彼女の声は、他の声が変わってしまったのです」(LS75)と作品にある通り、彼女の声は、人間のものではない声、彼女という人間の意志を伝える声ではなく、主人公のブランシュがそうだったように、ただ神の意志のみを伝える声が変わってしまったのである。その意味を象徴するように、彼女の手元にはやがて、革命の嵐の中で行方知れずであった「栄光の幼きイエスの像」が戻ってきた。彼女は、主人公ブランシュが示した恐怖と不安の時代の様相を正しく認識し、それを受け入れ、キリストの

教えに従って生きることを決断したのであった。これは神の告知に従い、イエス・キリストを生み、育て、死を見守った母マリアのように、キリストの教えに従い、彼女の一生を捧げることであることを象徴しているといえるだろう。こうして彼女は革命の終わりとともに、戻ってきたキリスト像の前で復活を祝う祈りを司祭とともに誦えたのである。

マリの人生の顛末を知らせ、主人公ブランシュの最後を見届けたこの物語の語り手は美しい人間性を信じる友人に対して、次のようにこれらの事件の意味を考えるように促す。

「あなたは感動していますが、同時に不安でもあるでしょう。なぜかわかります。それは、あなたは女丈夫の勝利を予期されていたのに、か弱い女に起きた奇蹟を経験したからです。しかし、そこにかえって、無限の希望が潜んではいないでしょうか。人間的なものだけでは充分ではないのです、またお互いにあんなに感動した〈人間的な美しさ〉だけでも充分ではないのです」。(LS79)

そして、「もう一度、あなたがお話しになる番です」(LS79)と人間中心主義者とおぼしき友人に迫るのである。

この言葉は明らかに、ル・フォールの読者に対する問題提起であり、現代の人間中心主義的思想だけでは解決できない問題をいかに解決するか、すなわち人間を超える存在である神の問題を再考するよう暗示している。それはこの作品が発表された1931年という時代の「来るべき運命の切迫した予感によって、当時ドイツに暗い影を落としていた時代の深い恐怖感<sup>4)</sup>」や「終末に向かう時代全体の死の不安の具現<sup>5)</sup>」という言葉で表されるような戦争へと向かいつつある世相に警告を発し、宗教的な見地からこれを厳しく弾劾するものであったといえよう。

4) 5) Gertrud von le Fort : Zu Georges Bernanos' „Die begnadete Angst“, in: *Aufzeichnungen und Erinnerungen*, (Einsiedeln) 1951, S.93.

## 1-2 修道女の不信仰 その2)

同じように、『フォン・バルビー童貞の召命』(Die Abberufung der Jungfrau von Barby, 1940)の主人公バルビー童貞の母代わりである女子修道院長(Frau Äbtissin)も、前述のマリと同じような類型の人物に入るといえよう。彼女は教会に反感を抱くトマス・ミュンツァー<sup>6)</sup>に率いられた異端者の跋扈する時代(1520年代)に生きているが、彼らが修道院の窓の外から罵声を浴びせても、マリと同じく、怖気づいたり驚愕するような事のない、強い心の人間である。姿も「太って堂々として、しぐさも美しく、指導者らしく、…顔立ちも、固い滑らかな非のうちどころがない木から彫り出されたように、威厳のある信心深い表情で、多くの娘たちの母らしい、善良で正しい」(AJ81-82)ひとである。彼女の声も「美しい、豊かな、指導者らしい声」(AJ83)と称えられ、周囲の人々にもその力量と人柄が認められている立派な女子修道院長であった。しかし彼女は、バルビーが神の召命を受けていることを軽視し、それをわざと見ないようにし、バルビーが召命の際に神からどんな内容の幻視を受けているのか、バルビーの方はいつでも話すという意志を示しているのに、それを聞こうともしない。ところが、やがて不承不承バルビーの受けた召命の内容をたずねた修道院長に対してバルビーが語ったのは、神の意志によって神の愛が死んでしまい、この世から神の姿が消えてしまったという「剥き出しの神性の荒野」(Die Wüste der nackenden Gottheit) (AJ110)となったこの世の姿であった。その結果、バルビーは神の花嫁になり、その愛を受けるはずであったのに、実際には彼女は「花婿から引き離された時の花嫁の愛」(AJ108)を味わうことになったと修道院長に告げたのであった。これがバルビーの召命を通じて人々に示された「新しい神の愛」(AJ108)、すなわち、神から引き

離された苦痛に生きる、不信仰なこの世の実相であった。しかし善良で疑うことを知らない修道院長はその意味を理解し、真摯に受け止めることができない。反対にバルビーが不信仰者であるとして、彼女を謹慎処分にしてしまう。そのため周囲の暴徒たちが修道院に押し寄せるかもしれない危険があるのに用心を怠り、彼らは暴徒に襲われてしまうのである。謹慎中で居室にこもっていたため、何も知らず逃げそびれたバルビーを暴徒から救おうと、院長は必死にかけつける。しかし、その甲斐もなく、バルビーは殺害されてしまう。愛するバルビーを失い、修道院は暴徒によって大いなる被害を受けて、修道院長は悲嘆に暮れる結果に終わる。最後になってはじめて、彼女はバルビー童貞が預言していた神なき時代の不穏な空気を読もうとしなかったことを心から悔いて、改心する。彼女は暴徒たちへの報復を提案する大司教に対して「猥下、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」<sup>7)</sup>(AJ130)と言う。これは自分の非を率直に認めた彼女の、謙虚な祈りである。

この作品は1940年に発表された。次第に狂暴化し、国内の文化活動も迫害しつつあったナチス政権の時代にあって、作者は厳しい時代を生きる心を読者に伝えようとしたのであろう。この作品の発表後1941年には、多年ル・フォールが他の多くの作家とともに、そこを根拠として作品を発表してきたカトリック系雑誌「高地」(Hochland, 1903 - 1941)も、遂にナチスによって発禁の憂き目に遭い、主宰者カール・ムートもその後まもなく亡くなってしまった。自分たちを弾圧するナチスと、それに同調する人々へのル・フォールのキリスト教徒的な寛容の態度が窺える作品である。

6) Thomas Müntzer (Münzerともいう) (1489 - 1525) は、プロテスタントの神学者、農民戦争時代の革命家。農民戦争を指揮し、諸侯側と闘い、捕らえられて処刑された。

7) この箇所はルカによる福音書23章、34節(以下、[23, 34]のように表示する)にある言葉である。イエスが十字架につけられる場面で、自分を迫害した民衆のために祈った言葉である。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」。同様の表現はマルコによる福音書11, 25の「誰かに対して何か恨みに思うことがあれば、赦してあげなさい。そうすれば、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちを赦してくださる」にも見られる。

### 1-3 高位聖職者の不信仰

他方で、ル・フォールの作品には、「女子修道院長」のような、敵を愛するというキリスト教的な寛容の態度をとることを拒否したために、信徒を失う聖職者もまた描かれている。『天国の門』の登場人物で、カトリック教会の象徴でもある「枢機卿」(der Kardinal)がその人である。彼は世慣れて物のわかった人であり、開明的で偏見のない知識人でもあって、自然科学にも明るく、その科学の真理を認めてもいる。天文学者のガリレオにとっても大いなる庇護者とみなされている。ところが、ガリレオの研究によって地球が宇宙のなかの小さな星屑にすぎないことを、ガリレオの弟子でもある枢機卿の姪ディアーナが知ったとき、彼女は神への信仰を失ってしまう。彼女は言う。

「わたしたちの信仰は、もうこの宇宙の中にどんな場所もなくなってしまったのだわ」(TH403)「私たちにはもう神様はないの。私のことを気にかけてくださる神様はもういらっしゃらないの。あるのはもう私たち自身だけ。…自分たちだけしかないの。これからはもう、人間が人間にとってすべてでなくてはならない!…」(TH404)

ガリレオは科学研究をしてもキリスト教徒でありうると主張していたが、弟子のディアーナがその研究によって信仰を失ったことを知った枢機卿は、教会の高位聖職者として信徒たちを守るために、ガリレオの学説を異端と認定してしまう。彼は、愛する姪ディアーナや、同じくガリレオの弟子である若いドイツ人科学者が、教会の寛恕を求めて「敵を愛することが離反に打克つ、残された唯一の道なのではありませんか。また同時に、それは自らを地上における神の代理者と信じている教会が、神様によって正しいと証される方法ではありませんか」(TH422)と哀願したにも

関わらず、遂にガリレオと彼の学問である科学を赦さなかった。その結果、ディアーナは怒りのために教会から完全に離れてしまう。彼女は枢機卿に対して、「あなたがたが滅ぼす科学が、いつかあなた方を滅ぼすことでしょう!」<sup>8)</sup>(TH422)と、厳しい呪いの言葉を投げつけ、ついに棺のような駕籠に乗せられどこかに連れ去られて、この世から葬られてしまう。一方若い科学者は元来敬虔なキリスト教徒であったのに、彼の学問に教会が祝福を与えなかったために、信仰を放棄してしまう。彼は「私の故郷はもはや教会ではなく、人間精神のたくましい新領域なのだ」(TH441)と考え、自由なる研究法則のみを頼りに、自由と真理の中に、自分と人類のための新しい荘厳な殿堂を築くことを誓って、ローマを去っていく。

この作品では科学と信仰の分裂の問題が扱われているが、ル・フォールはその責任を主に、枢機卿に象徴される教会側の頑迷な態度に負わせている。しかし、枢機卿はそのようにしなければならなかった聖職者の苦衷を次のように語る。

「新しい世界像も、自然の新しい研究も、本当に信仰深い人を損なうようなことはないかもしれない——しかし一体、本当に信仰深い人がいるのだろうか?」(TH428)「私は信仰薄き人間だ——我々聖職者は…いつも信仰薄き者だった。なぜなら我々は、いつも異端者たちを迫害し、根こそぎにしてきた。主は毒麦と麦とを、収穫の日まで二つながら生やしておくようにとお命じになったにもかかわらず、我々はそうしなかった。我々は、全く一度もこの掟に従わなかった。我々は従うことができなかったのだ。何故なら、そうしなければ、毒麦はとっくに麦を根絶えさせてしまっていただろう。そして今日でも、我々は主の掟に従うことはできないだろう」<sup>9)</sup>(TH429)

8) 異本によれば、註7)のマルコによる福音書11:25の後に続く11:26では「もし、赦さないなら、あなたがたの天の父も、あなたがたの過ちをお赦しにならない」と続くという。この箇所を参考にされたい。

9) 新約聖書のマタイによる福音書13:24-30の「毒麦のたとえ」を引用。マタイによる福音書13:28-30において、畑に敵が蒔いた毒麦を僕たちが抜き集めようと主人に言うと、「主人は言った、『いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れの時、<まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉にいれなさい>と、刈り取る者に言いつけよ』」と書かれている。主人(神)がそのままにしておけと言ったのに、毒麦(不信仰者)を刈り入れ前に抜いてしまつて、麦(信仰者)まで一緒に抜かれてしまったという、枢機卿の嘆きの表現と思われる。

そして聖職者もまた、一千年前の啓示以外に頼るものもない孤独の中で、真に救いがあるのだろうかという懐疑の苦悩に苛まれており、その様子は水の上を渡ろうとして溺れてしまったペテロのようだ<sup>10)</sup>(TH430-431)と嘆くのである。

彼の不信仰は、たやすく信仰を失う弱い人間に対する不信感からくるものであるが、同時に彼が神の力に全幅の信頼を寄せていないことから由来している。若い科学者が、ペテロは海に沈んだのではなく、「キリストのみ手をつかんだのだ」(TH431)とさらに反駁すると、枢機卿は「我々が当面している今この瞬間、どこにそのみ手があるというのか」(TH431)と、絶望的な言葉を述べるのみであった。枢機卿は彼の前から姿を消し、苦悩のきわまった、限りない孤独のうちに引きこもり、若い科学者の呼びかけにも応えなくなってしまう。

こうして教会は新しい世界像を承認せず、赦さなかったことによって、新しい時代の精神の象徴である、若い科学者の教会への信頼、ひいては神に対する信仰を失い、枢機卿自身も最愛の姪を失ってしまうのである。このことは教会が未来への希望と教会に対する人々の敬愛を失ったことを意味することは明らかであろう。多くの信徒の魂を救おうとして、寛容さと愛を忘れ、かえって信者を不信仰の淵へと追いやり、教会自体も孤独のうちに苦悩するという厳しい事実とその批判が描かれているといつてよいだろう。

一方、近代科学の象徴でもあるガリレオ、ディアーナ、若い科学者たちは、教会の裏切と不寛容な態度への報復として、同じように教会を赦さず、不信仰者として生きることを選択する。そこには教会と同じく、彼ら自身の教会への不寛容もまた存在することをル・フォールは指摘する。

この作品には、教会と科学的精神の両方に対するル・フォールの厳しい目を感じるとともに、苦しむ教会と、気付かぬうちに生の根源を失い、ディアーナのように棺の中に入ってしまった科学精神への憐憫と批判もまた感じざるを得ない。ここには信仰を失った人々に対する教会側の責任と、それを取り戻すための教会側と科学者の側の双方が、互いに愛と寛容の心を持つべき必要性が説かれているといえよう。

## 2 一般信徒の不信仰

上述のように、聖職者ばかりでなく、一般の人々のうちの不信仰者も数多くル・フォールの作品に登場する。たとえば、『無辜の子ら』(1953)の主人公ハイニの信心深い祖母、『ヴェローニカの聖顔布』(1928)の主人公ヴェローニカの祖母、『すべてを超えて』(1956)の摂政妃殿下など、多くの人々が敬虔なキリスト教信者であるように見えながら、作品中で、その態度の立派さや敬虔な信仰心が実は現実を認識していないゆえのわがままや不信仰であるとみなされている。

彼らの特徴は、本人はキリスト教の教えに従っているつもりでも、周囲から見ると、実は我意を通そうとしているだけであるという点にある。ここではヴェローニカの祖母、『無辜の子ら』の主人公ハイニの祖母、『すべてを超えて』の摂政妃殿下を中心に彼らの周囲の人々も含めて検証してみよう。

### 2-1 神に逆らう人々 その1)

『ヴェローニカの聖顔布』の主人公ヴェローニカの祖母は、堂々として若いときは勿論、年取っても知的で美しい。彼女は人生経験を重ねた人間

10) 新約聖書の「マタイによる福音書 14, 28 - 31 の『湖の上を歩く』、およびマルコによる福音書 6, 45 - 52、ヨハネによる福音書 6, 15 - 21」を引用。その内容は次のようなものである。

イエスが湖の上を歩いて、逆風に悩まされていた船上の弟子たちのところに行った。それを見てペテロが同じように水の上を歩いて行きたいとイエスに願い、水の上を歩いてイエスの方に進んだ。「しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたので、『主よ、助けてください』と叫んだ。イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、『信仰の薄いものよ、なぜ疑ったのか』と言われた」と書かれている。ペテロはカトリック教会の最初の教皇とされる。そのペテロの後継者である教皇を補佐する立場にある枢機卿は、ペテロが信仰薄く、水に沈みかけたことを重視した。一方、対話相手の信仰厚い、若いドイツ人科学者の方は、イエスに救われたペテロを重視した見方をしている。

のもつ豊かさと上品さを備え、威厳と才気に満ち、美しい銀髪の輝きに包まれて「ロココ時代の若い貴婦人のような」(SV16)女性である。彼女はまたローマ神話の女神ミネルヴァにも喩えられている。彼女の精神世界には人間の偉大さ、勝利に満ちた高貴な不死性があり、「最初に偉大で高貴な王国があった。そのために地上が創られ、すべてのものが創られた。そのために世界史がある」(SV23)という記述のとおり、人間世界の偉大さとすばらしさのみを信じている。その一方、彼女の孫、主人公のヴェローニカは、彼女の世界では「奇妙に正しく、理性的に」(SV22)物事が進み、「謎めいたものや恐ろしいこと」「現実の抑圧や困難さ」がなく、「疑わしい人物や出来事」(SV22)が登場しないことに奇異な思いを抱いている。

祖母は好意から昔の恋人の妻ヴォルケ夫人やその息子の詩人エンツィオをローマの屋敷に招き、彼らを自分の家族同様に愛し、彼らからも感謝され、愛されていると思っていた。しかし、実際のところはヴォルケ夫人は、亡夫とヴェローニカの祖母との繋がりに嫉妬し、恨んでいたのである。そして、祖母が自らの愛をあきらめ、恋人をヴォルケ夫人と結婚させたことによって生まれたエンツィオは、祖母の知的な相続人と目されていたにもかかわらず、実母に従いヴェローニカの祖母のもとを去ってしまうのである。これによって祖母は苦悩と失意のうちに世を去ってしまうが、彼女はだまってそれを耐え忍び堂々と死んでゆく。祖母は善良な女性であるが、彼女の影となって生きてきた、元の恋人の妻子の気持ちには全く思い及ばなかった。それは彼女の純粋で悪気のない人間性と、それゆえに人間の暗い面には全く気付かない善良さのゆえであった。彼女は厳しい現実を承認しようとはせず、それに対抗できる術も持たなかった。しかし、それに気付いたとき、彼女は言い訳せずに堂々と自分の生涯の結果である苦しみを受けとめ、死んでゆく。それは見事なもので、ル・フォールは彼女の屋敷で働く敬虔なカトリック信

徒、家政婦ジャネットの言葉「苦しみもまた愛にすぎないのです」(SV303)によって、その姿勢をキリスト教的なものとして評価している。それゆえ、ル・フォールはこの異教の女神を畏敬と同情を持って遇し、決して裁きはしない。

一方、彼女の娘、エーデルガルト (Edelgart) は「追放された天使」(SV46)のような外見で、若いころから聖体に神の愛を感知して、教会に通っているが、信仰するに至らず苦悩する存在である。彼女は中途半端な状況にあるため、恋人も心から愛せず、失望した恋人は彼女の妹と結婚し、ヴェローニカを儲けた。その後妹が亡くなったので、恋人はエーデルガルトと祖母に娘を預けて仕事のため遠くへ行ってしまったのである。エーデルガルトはこういった悲劇のすべてが自分の責任であると思い込み、姪を母代わりとなって育てている。しかし彼女のヴェローニカへのキスは祖母のように愛に満ちたものではなく、「うわべだけのキス」(SV16)であり、「かすかな息のように控えめで、儂い」(SV16)のものであり、彼女が本当には生きていないような状況にあることを表現している。彼女は当時流行の精神心理学に頼ったりしながら、神を忘れてなんとか立ち直ろうとするが、神は彼女を呼ぶのをやめない。遂には姪のヴェローニカが彼女より先に信仰に目覚め、十字架に向かって跪くようになる。それは自らに従えという神の意志を、エーデルガルトにさらにあらわに見せ付けるものであった。彼女は呼ばれても行くことができない自分の自我の頑強さと、神の呼び声の強制力との板ばさみとなって苦悩し、遂に呼ぶのをやめない神を憎むようになり、十字架をたたきつけて壊そうとする。その形相は怒りのため、彼女の顔の輪郭を崩すほどの「忘れがたいほど恐ろしい表情」(SV333)であった。しかし彼女が我を忘れて怒り狂っている時、神はヴェローニカを通じて、最終的にエーデルガルトの自我を破壊し、自分のもとへと引き寄せるのである。その際、ヴェローニカは自分の中に「自分を神の愛へとあ

れほどしばしば引き寄せたあの愛」(SV333)が充満し、自分が神の愛の意志に乗り移られたことを感じ、伯母に対する神の愛を示すために、伯母の中の悪魔の怒りと闘うことになる。そのとき神の示した十字架の愛の一撃によって「彼女(エーデルガルト)は打ち倒されて横たわり、…彼女の力、或いは意志は突然否定され」(SV334)たのであった。このような自我の崩壊を経て、彼女は神へむかって心を開き、従順な人間となったのであった。その後エーデルガルトは病の床につき、自分が神の特別な恵みを戴き、神の愛とカトリック教会の聖性に気づきながら、その神に全的に信服せず、逆らいつづけた罪を懺悔し、罪を赦されて死んでいくのである。

エーデルガルトは神を憎んだが、神は徹頭徹尾彼女に愛を与えつづけ、それは暴力的なまでに強い愛であって、彼女は逃げることはできない。何故なら「我々は、神が愛となって降りてくるための啓示の場として、人間を指し示される」(WG63)というル・フォールにとって、人間とは「神の愛の出現する」(WG63)ところであり、その愛は本来的に人間に内在するものであるから、エーデルガルトは決して逃れられないのである。

この長編小説の第二部において、エーデルガルトと同じように、敗戦と戦後の苦しみから希望を失ったヴェローニカの恋人エンツィオ(Enzio)もまた、エーデルガルトと同じくヴェローニカに教会へ行くのをやめ、信仰を棄てるように迫る。そのときヴェローニカは伯母に対してと同じように、神の愛を伝えるために、教会から得られる救いのすべてを棄て、ただ愛を示すことに専念する。先述のように、ル・

フォールにとっては「永遠に変らぬ神の愛の啓示こそがキリストである」(AE25)であり、愛こそが神の実体であるからである。この小説は教会の仲介による救いを無視したということで、カトリック教会の神学者たちから批判されたのであるが、ル・フォールにとっては「愛」こそが神の文学的象徴であり、教会の教えに背いているわけではないのである。神に背く人々の苦悩や憎悪もまた人間に内在する神の愛が、彼らにその存在を気付かせようとする一つの表明の形だからであるから、それに応えることが信仰者や教会の責務であるという彼女の意志が示されていると思われる。<sup>11)</sup>

## 2-2 神に逆らう人々 その2)

続いて、『無辜の子ら』の主人公ハイニの祖母は、ヴェローニカの祖母ほど輝かしくはないが、同じように「体格がよく、堂々としていて」(DU338)、単純で善良な性格の女性である。彼女は敬虔で、毎朝馬車に乗って教会のミサに行くが、執事は仕事日に御者と馬を祖母に取られるので仕事が進まず困っている。しかし祖母は「こうして教会にお参りしていると、私たちみんなにも、あなたの農場のお仕事にも、神様の祝福があるのですよ」(DU339)と、さもそれがキリスト教徒として立派なことのようにいう。祖母は平常はキリスト教徒として立派な行いをするように主張するのに、いざ自分の愛する息子、ハイニの叔父エーベルハルトのこととなると、道理を曲げて彼をかばおうとする。叔父は第2次大戦中にフランスのオラドゥール村の村民の皆殺し作戦に関わった兵士た

11) 『ヴェローニカの聖顔布』第二部の『天使の花冠』(1946)のなかで、主人公ヴェローニカがエンツィオを救う際に教会の仲介に抛らず、個人的に神の特別な恩恵を頼りに不信仰者である彼を救うという行動をしたことに対して、カトリック教会の側から、問題があるとして、ル・フォールは大いに反駁を受けた。彼女は自分の文学の登場人物はある精神の典型や象徴であり、現実の人間の行動ではないと釈明している。詳しくは拙論「ゲルトルート・フォン・ル・フォールの文学の特徴について——女性、教会、祖国を中心に——」(『キリスト教文藝』第十八輯)、註(3)(4)、S.88-86を参照されたい。

この件について、彼女は友人A.M.ミラーに「私の小説『天使の花冠』が多くの嵐を巻き起こしたことは、私を繰り返して驚愕させ、びっくりさせました。私は、人々がそこに象徴性を認識するに違いないだろうと思います。また必ずしも、人々が話の筋にのみよりかかっているわけでもないと思います。私はしばしば我々の批評の水準の低さに驚きます。批評は外国ではしばしばはるかによいのです、あらゆる所に否定的な態度をとるグループはありますけれども」と書き送っている。(Arthur Maximilian Miller: *Briefe der Freundschaft mit Gertrud von le Fort*, Memmingen (Maximilian Dietrich Verlag) 1976, S.115-116.)



ちの指揮官であった。その罪のためにフランスで裁判を受けている部下たちは、自分たちの指揮官がその責任をとるべきであると主張している。祖母は、息子はそのとき部隊を留守にしておき、実際に彼が指揮をして虐殺をしたわけではないというので、彼にはその責任がないと強弁するのである。

このような祖母の態度については、ハイニの家庭教師ウンガー先生が、また義弟エーベルハルトとの結婚を勧められているハイニの母メラニーが、祖母に対して、厳しく反駁する言葉があたっているであろう。ウンガー先生は「今日では信心ぶかい人を見ても、その敬虔さが信じられなくなったのは、どういうところからきているのでしょうか」(DU351)と述べ、形ばかりで真実の信仰に欠けている人々の多い現実世界を憂える。またメラニーは、夫の生前に義弟を愛していたから、結婚するのが順当だという祖母の言葉に対して、「お母様、だからこそ私は結婚できないのだということがお分かりでないのですか。…お母様は自分の望んでいることが何なのか、分かっているらっしゃらない」(DU342)と反発している。ここには祖母の独善性、道徳意識の低さが如実に描かれている。

しかし、物事の理非を曲げ、キリスト教徒としての良心も棄ててまで、息子の将来を前途あるものとし、彼の命を守ろうとしたハイニの祖母は、最後に孫のハイニから厳しい反撃を受けることになった。ハイニは「エーベルハルト叔父さんが…そもそもここからいなくなってしまうえば一番いい」(DU334,340)「叔父さんが本当に憎い」(DU364)と考え、彼を追い出すために、一族の男たちがその音を聞くと気が狂うという言い伝えられている古い正義の鐘、フリーデリチアの鐘を鳴らし、叔父を放逐してしまうのである。なぜなら、ハイニは戦時中に軍隊の非人道的な命令に抗

して自殺した父と同じく、この一族の良心を担う存在であるからである。

祖母はこれまで、不信仰な嫁に対して「無辜の人々の苦しみがあることによって世界は救われてきたのです。…罪なくして苦しんでいる人々を見ると心が和らぎ感動します。キリストも罪なくして苦しまれたのです。これを認めない限りあなたはいつまでもキリスト教徒になれませんよ」(DU351)と嘯いていたが、愛する息子を失ったときにはじめて、多くの不幸な人々の気持ちを理解したのであった。それは丁度バルビーを失い悲嘆に暮れた女子修道院長と同じである。彼女もまた、やっと、自分の信仰が苦悩に打ち克つ力を持つような物ではなかったことを、知ったのであった。

一方、ハイニの母メラニーもまた、「処女マリア」(DU331)に見えるほど美しく良心的な女性であるが、神への信仰を失っているという点で、不信仰者の仲間である。彼女は夫を失い、戦火の中で幼い息子を守ろうと逃げ惑ううちに、多くの幼子が爆撃によって焼け死ぬのを目撃し、息子を失うかもしれないという不安と恐怖のなかで神への信仰を失ったのである。その理由は、聖母に守ってくれるよう祈ったにもかかわらず、守ってもらえなかったからである。彼女はハイニが母を守ろうとクリスマスにプレゼントした「プラークの幼児キリスト」(DU346)を見て、「かわいそうな、小さな幼児キリストさま、あなたのお手で恐ろしいことをお防ぎになれたことがございますか？」(DU349)と絶望的な言葉を述べる。彼女はまた、義弟の戦争中の罪業を厳しく非難する。しかし、神の加護を信じられず、縋るものがない不安と恐怖に苛まれた彼女は、「絶望的で捨て鉢な」(DU351)状態に陥り、すっかり気力を失って良心に蓋をしてしまい、義弟との結婚から逃れられなくなる。ハイニはその姿を目にして、彼女は眠

りながらうわごとを言っているようだ<sup>12)</sup>と思い、「ママの眠りを覚ますのが不安だ」(DU358)と言っている。しかし、そんな状態であっても、彼女が救いを求めて、わらしべ一本にでも縋りたい様子であり、そんな母親のために息子のハイニは、「僕はママがお縋りになるわらしべになってあげなくてはならない」(DU359)と思う。母を守ろうとしたハイニの鳴らす正義の鐘の音によって、彼女の良心は目を覚まし、彼女はエーベルハルトとの不本意な結婚から逃れることができたのであった。彼女はオラドゥール村の婦人や、彼女の姑と同じく、家族のすべてを失ってしまったが、同時に彼らと同じ立場となることで、同じ悲しみを体験した者による連帯を手に入れたのであった。

彼女と同じようにハイニの家庭教師のウンガー先生もまた、良心的だが、戦中戦後の苦しい時期を経て、希望を失って何物にも関心を示さない。ハイニの叔父は「彼もめっぽうひどいめにあってきたこのごろの青年の一人ですよ。…ドイツじゃどこへ行っても青年はあんな風です。…このごろの若い者は、すっかり意気地なしになってしまいましたよ」(DU339)と、彼を馬鹿にする。しかし、彼はハイニの母に恋をして少しづつ希望を取り戻していた。ところが、彼女が義弟と結婚すると知り、ついに完全な絶望に陥ってしまう。彼を心配するハイニの母に対して、彼は「ご安心下さい。…最後の妄想から目が覚めた人間は、もはや何があるかと悩んだりしませんよ」(DU360)と言って、姿を消してしまう。残念ながら、彼にはハイニの同情以外は何の感謝も与えられていない。しかし、ハイニは神の意志の具現化された人間であるから、その同情は神の同情であろう。

### 2-3 神に逆らう人々 その3)

『すべてを超えて』(Plus ultra,1950)においては、主人公アラベラの仕える摂政妃殿下が上述のヴェ

ローニカの祖母のような金色の輝かしい光輝に包まれた(PU275)人として描かれている。彼女は女性として美しさに溢れ、行政手腕に秀で、神聖ローマ帝国皇帝である甥とその妻や子供たちをわが子のように愛し、人間として欠けるところがなような才気煥発な女性である。しかし、ただ一つの欠点は、亡き夫への愛のために心がいっぱい、「神を受け入れる心の余地がない」(PU298)ことであった。そのため周囲の人々から不信仰の疑いを受け、教会からも警告を受けている女性である。彼女もまた、ハイニの祖母らと同様に、信仰者としての義務はきちんと果たしている。しかし彼女に仕える侍女アラベラは次のように、かつての主人の態度を批判している。

「しかし、摂政妃さまがあまり信心ぶかくないことを私はずっと前から感じておりました。…もちろん、信仰の義務は、どれも良心的に履行されていきました。なぜなら、尊母様、別に信仰心がなくても、それくらいのことはできるからです。…教会へ行って、跪き、命じられた祈禱文を読むくらいは、造作のないことです。容易でないのは、ありとあらゆる誘惑の糸でもってこの地上に繋ぎとめられている魂を、天上にまで高めることです」。(PU288)

またこう批判しているアラベラ自身もまた、自分自身がいかにか不信仰であったかを告白している。

「私たちは摂政妃さまに従って、毎日ミサに参りました。それは立派な敬虔な行列と見えたことでありましょう。…そのなかに私も混じっていたのですが、他の方がたと同じく信心深く見えたことでしょう。しかし、私の心は神様からずっと遠いところに離れていました」。(PU288 - 289)

摂政妃殿下が神に目を向けられないのは、夫への愛が神への愛に優っていることに、やましい気

12) この箇所は次の聖書の場面を参照されたい。ルカによる福音書 22, 46, (マタイ 26, 36-46, マルコ 14, 32-42)「イエスは言われた。何故、眠っているのか。誘惑におちいらぬよう、起きて祈っていなさい。」眠って、悪魔の誘惑に陥らないようにイエスが弟子に警告した言葉。ハイニの母が叔父のエーベルハルトの悪の力の誘惑によって良心を眠らされている状況をこのように表現したものと思われる。

持ちがあるからである。しかし、彼女は、夫のために捧げた教会に神のための祭壇を設けるように伝えた皇帝の命令に従おうとしなかったので、それを批判する神がアラベラを通じて発した「至上を超えて！」(Plus ultra) (PU311) の声によって、人間的なものをすべてを超える神の存在を悟り、衝撃を受ける。彼女はうろたえて怪我を負い、それが因で亡くなってしまう。しかし彼女はその苦痛の中で反省をし、神が愛をもって自分を裁いたこと、そして自分が神に愛され、赦されている存在であることに気付くのである。彼女は言う。

「あらゆる永遠を通じて、ただ一つの愛だけがあるのです。そしてその愛は、たとえこの世がそれを地上の愛と呼ぼうとも、天国から来るものなのです。…ええ、私は神様を愛しています。ずっと前から愛していました。神様の似姿において愛していました。」(PU315)

こうして彼女は、夫への愛が本来は神に由来する愛であることを確認して、信仰を回復し浄福のうちに亡くなっていく。

一方、彼女の回心の手助けをしたと同時に、彼女を死へと向かわせた主人公アラベラもまた不信仰である。彼女も、皇帝への地上の愛に生きているので、その点では摂政妃殿下と同じである。彼女の望みは、若すぎたために皇帝への自分の愛を認識できず、彼の愛の視線に答えられなかった自分の気持ちを、彼に直接伝えることであった。しかし、そうするためには修道女になり、この世から消え去ることが条件であった。彼女はその道を軽率に選択した。しかし、その後、その意味することが実際には厳しいことに気付く。彼女はその絶望感から、激しい「絶望的な情熱」(PU324 - 325) を燃え立たせて、この機会を逃せばもはや二度と会う事のない皇帝に対して、身分の壁を超え、人間としての心の尊厳において彼と対等の立場に立つことを決意する。そして、臆することなく堂々と摂政妃殿下の言葉に託して、自分の愛を訴えるのである。「陛下、…妃殿下の最後のお言葉

はこうでございました。『私は神様を愛しています。昔から愛していました。私は神様をその似姿において愛しておりました。——というのは、愛というものはただ一つしかないからです。——神様はあらゆる愛を、それが神様ご自身に捧げられたもののようにお受けとりくださいます』。(PU325) こうして、彼女は、「自分の生涯のただ一つの意味」(PU325) である皇帝の愛の視線に、愛をもって応え返すことができたのであった。これに対し、皇帝は、畏敬の念をもって、彼女が不本意ながら申し出た修道女の請願を取り消し、自分の人生を決める自由を彼女に与えた。彼女がそれを喜びつつ、やはり修道女になることを選択し、自分の修道生活を皇帝に捧げることを伝えると、皇帝は摂政妃殿下の葬儀の際に自分の名代として彼女を任命し、彼女の愛に報いるのであった。

ここには神の「愛」に対するル・フォールの無限の信頼が語られている。この小説では、人間のみを愛して神を愛そうとしない不信仰な摂政妃殿下とアラベラは、教会や人々にそのことをキリスト教的ではないと非難されようと、頑強に従おうとはしない。しかし、教会の庇護者としてその意志を実行しなければならない立場にある皇帝の命令によって、二人ともに自分のわがままや不従順な意志を打ち砕かれ、やっと自分の非を悟るのである。皇帝が伝えたのは、実は教会を通じての神の命令であり、いわば神は不従順な二人を厳しい父性的愛をもって裁いたのであった。それによって彼女らは逆らいがたい厳然たる神の秩序の存在とその意志に気付き、神の方に目を向けざるを得なくなった。ここには抗いがたい力で人間を自らのもとへと引き寄せる、神の人間への愛が描かれている。同時にここには皇帝や夫から愛されたアラベラや摂政妃殿下の、彼らへのやみがたい愛も語られている。この男女の愛の主題は、中世以来キリスト教神秘主義的著作のなかで語られてきた神と人間との直接的な交歓にその由来がある。そして古くから聖書の雅歌でうたわれる花嫁人間と

花婿キリストの互いの愛の交歓が、この作品においては神聖ローマ帝国の宮廷という人間世界に移しかえられて、神秘主義的、象徴的に描写されていると思われる。

### 3 不信仰者の意義

ここまで、ル・フォールの作品に登場する多くの、さまざまな不信仰な人々を見てきたが、その特徴をまとめると、第一に気性がまっすぐで善良な人々が、厳しい現実の意味を認識することができず、気付かずに、或いは心の底で気付いていても認めようとしないうえ、結果として不信仰に陥る場合、第二に良心的ではあるが、現実の苦悩を受けとめたり承認したりできないため、絶望から無気力に陥った人々、第三には信仰喪失の痛苦やそこからくる精神的抑圧が原因で、逆に教会やキリスト教を憎悪する人々などである。これらの人々は、ハイニの叔父を除けば、決してその本性において悪人ではなく、実は単純に気付かなかつたり、耐えきれない不幸や苦悩に打ちひしがれたりしている哀れな存在である。そして、彼らの絶望と不信仰は彼らには理解しがたい人生の苦しみとその意味の無さに由来するものである。彼らを救うために必要であるのは、その苦痛を意味あるものとする、あるいは希望へと導く別の考え方である。それが『断頭台の最後の女』の語り手のいうところの「人間的なものだけでは充分ではない」という言葉である。そしてまた、『天国の門』の最後で語り手が最後に、神への期待を込めて言う言葉「そうだ神はまたなにかおっしゃるに違いない」(TH450 - 451) という言葉である。それは、科学者が再びこの世に神を見出すことを怖れているのではないのか、と聞かれた時の、若いドクトルの次のような返答に触発されたものである。

「そうです。…我々は怖れています。なぜなら我々はいたるところで、ぎりぎりの限界にたっているのですから。そして我々が再び神を見出すとすれば、もう神を我々の因果律の中に閉じ込めることは

できないでしょう。——その場合、神は、本当になにか発言するにちがいないでしょう。しかし、さしあたってはまだ、そこまでいっていないのです。だから、我々は我々の自由を利用するのです」。(TH450)

彼は科学が神という枠組みから自由であることを謳歌しつつも、合理主義的な人間の因果律に当てはまらない、偉大な神の存在を予感している。このことは大なる希望の表現であろう。

彼ら不信仰者はいわば、作者にとっては人間中心主義の現代人の類型であり、その悲劇的な姿を通じて、人間としての立派さや能力には実は人々を救う何の力もないことを示している。そのことを前提として、彼らが自分を超越するものを認識し、それに心を開くさまを描き、それに応える神の愛の存在をル・フォールは示唆しようとしている。彼らはそのために設定された人物たちである。従って、主人公と同様、彼らもまた作者の意図の実現には不可欠の人物たちなのである。

### 4 良心的な不信仰者

最後に、ル・フォールの最晩年に書かれた『大聖堂』(Der Dom, 1968)の登場人物の中で、特異な不信仰者を挙げておこう。それは不信仰者として本人は勿論、周囲にも明らかに認められている、主人公アンゲリーカの伯父のハッロー (Harro) である。彼は新・旧の教会の対立を苦々しく思い、「この世界にはただ一つの教会があるだけだ」(D12) といつも主張している。一方、彼の妻である伯母はカトリックへの改宗者であるが、宗教的なことに熱心で常に教会に通っているが、偏狭である。天涯孤独の姪のアンゲリーカを快く引き取ってくれるが、姪がプロテスタントの教会であるマグデブルクの大聖堂に行きたいといっても、宗派が異なるというので難色を示し、カトリックの教会に無理に所属させようとする。しかし、アンゲリーカはどうしても伯母の勧める馴れない教

会にいく気持ちになれない。アンゲリーカは亡くなった母と、いつもマグデブルクの教会に通っていたので、その教会に思い出があり愛着を抱いているからである。まもなく親戚に引き取られて引っ越してしまえば、二度とそこへは行くことができないので、遂に彼女は幼馴染と一緒に大聖堂に出かけて行くが、たどり着けないで夜になってしまう。そのとき途方にくれた彼女を心配して捜し、迎えに来てくれたのは伯父であった。彼は大聖堂で母の思い出に浸りたいというアンゲリーカの望みを知って、他日彼女をそこへ連れて行ってくれる。「お母さんは大聖堂で見つかったかい」(D52)と聞く伯父に対して、アンゲリーカは静かな確信に満ちて、「私のお母様は天国にいらっしゃるに違いないわ。でも、神様はお母様と同じように愛することができるお父様を贈ってくださったの」(D52)と伯父の愛に応えた。伯父もまた、彼女の感謝と愛を受け入れ、彼女をやさしく抱き寄せるのであった。

ここでもまた、信仰者である伯母の方が、不寛容な態度をとり、アンゲリーカの思いを受けとめようとしない。彼女としては姪を自分の宗派の神父さまに紹介したり、善意で導いているつもりであるが、姪の母を失った寂しい気持ちを理解せず、かえって姪を教会から離反させているのである。それに対して不信仰者とみんなが認める伯父ハッローは、現在のキリスト教教会の分裂状態に対して抱いている不信感ゆえに宗派にこだわらず、アンゲリーカの寂しさを理解し、彼女の教会での懐かしい思い出を寛容に受け入れ、マグデブルクの聖堂に連れて行ってくれた。そして、実はこのよ

うな寛容な愛に満ちた態度<sup>13)</sup>こそ、ル・フォールの期待する教会の本来あるべき姿であった。ここでは作者にとっては、信仰者の伯母の方が、その態度において不信仰であり、不信仰者である伯父の方が実際の行動において、真の信仰者であったのだと言えるだろう。

このような伯父の態度については、ドイツの神学者カール・ラーナー(1904-1984)<sup>14)</sup>の「知られざるキリスト者」(der anonyme Christ)と類似した思想が語られていると思われる。神学者稲垣良典氏<sup>15)</sup>によれば「知られざるキリスト者」とは「自分がキリスト者であることを自覚せず、また他の人々も彼がそうであることを気付いていないようなキリスト信者のことである。彼は洗礼を受けて教会のメンバーになっていないし、自分がキリストの恵みを受けていることを自覚もしていなければ、公言もしない。それだけでなく、彼は自分が無神論者であると確信し、そのように宣言しているかもしれない」人である。(稲垣 74) 同氏によれば、この思想はカトリック教会内部の激しい論争と反発を呼び起こしたという。これは教会がこれまで使命としてきた、地の果てまでも福音を伝えるという布教への熱意に冷水を浴びせるものであったからである。しかしラーナーは現代世界、キリスト教、教会などの状況を率直にみつめ、「もしも神が万人救済を意志しており、そして救われるために信仰が不可欠であるならば、すべての人が・・・信仰に達することが可能でなければならないのではないか」というところから論議を始め、「知られざるキリスト者」の存在が必然的に結論として引き出されると主張した。(稲垣 75)

13) Gertrud von le Fort : Zum 70. Geburtstag von Karl Muth, in: *Aufzeichnungen und Erinnerungen*, S.77, において、ル・フォールはカトリック雑誌《Hochland》(高地)に出会い、キリスト教内部の痛ましい対立や分裂にもかかわらず、キリスト教文化の共同の財産、すなわち「愛の態度」「抱擁的母性的な態度」を明確に体験したと述べている。そして、この体験が、その後の彼女が新・旧両派の教会の和解と統一を目指す道を選択する契機となったと思われる。

14) Karl Rahner(1904-1984)はカトリック教会の司祭、イエズス会員、20世紀を代表する神学者の一人。ドイツのフライブルク出身。マルティン・ハイデッガーの弟子として、神学的伝統と現代精神との総合を目指した。彼はカトリック教会内部の不都合な状態を批判し、全世界的な神学会議を推進し、神学と自然科学やマルキシズムとの対話を促進した。彼は第2バチカン公会議においてイヴ・コンガールらとともに、主導的な役割を果たした。カトリック信仰を現代的な感覚で理解し、常に人間という視点を保持しながら解釈したことで知られる。

15) 本文中のカトリック教会事情、および神学関係の内容についての言及は、引用文献 8) に挙げる稲垣良典氏の文献『現代カトリシズムの思想』および参考文献『ヨーロッパ・キリスト教史 VI 現代』に従った。

このような思想を可能にしたのは、現代世界と教会の状況について、19世紀の後半から次第に教会の姿勢が変わり始めたからであった。教会は長く敵視してきた科学をはじめとする近代精神との対話と和解を推し進め、必然的に、教会側に偏らない広い視点が生まれてきたからである。第2バチカン公会議（1964 - 1968）において、ラーナーは率先して公会議を主導し、それゆえに彼の主張に類似した思想が同公会議の公文書で表明されている。すなわち、キリスト教会に属している人であっても、「終わりまで愛にとどまらず、『体』では教会のふところにとどまりながらも、『心』でとどまっていな者は救われない」。（「教会憲章」14, 公文書99）つまり心からキリストの救いを信じ、その教えを実践する気持ちがないならば、たとえ教会に所属していても、キリスト教の真の信仰者ではないと言われる。しかし一方、教会に一切所属せず、教会の外にあって、自分自身もキリスト教を信じていないし、他の人々からもキリスト教信者と見なされない人々について、条件付きではあるが、公文書は次のように肯定的に述べている。「…また救い主はすべての人が救われることを望むのであるから（1テモテ2,4参照）、影と像のうちに未知の神を探し求めている人々からも、神はけっして遠くはない。…誠実な心をもって神を探し求め、また良心の命令を通して認められる神の意志を、恩恵の働きのもとに、行動によって実践しようとする人々は、永遠の救いに達することができる」。（「教会憲章」16, 公文書101）

すなわち、稲垣氏によれば自らそれと意識しないでも、或いはかえってその反対のことを表明していても、実際の行動においてキリスト教の教えを実践しつつ生きている無数の人々が存在する。キリスト者は制度や組織に所属することで安住しないで、他の人々と対話し、そのことを通して、ともに真の自己に立ち返り、互いに完全な人間性の成就に向けて努めるべきであり、そうすることによって、教会の未来への希望が拓かれるというのである。

ル・フォールの思いもまた、このような万人に

開かれた教会にあったといえよう。アンゲリーカの伯父ばかりではなく、『天国の門』に登場する、教会の愛と寛容な姿勢を求めたディアーナも若いドイツ人科学者も、現代の科学者ドクトルも、『すべてを越えて』の摂政妃殿下やアラベラも、『無辜の子ら』のハイニの母もウンガー先生も、ル・フォールの小説の登場人物は世間からは不信仰者と言われつつも、心の底では神を認め、神を求めてやまない。これは決して本当の不信仰者とは言えない。おそらくこのことはル・フォール自身の人間観に由来するものである。彼女にとって、人間とは神の愛の啓示が実現成就される場所である。人間自身が気付かなくても、人間の内部には常に神の愛が宿り、その意味で真の神の似姿なのである。従って、彼女にとって人間は常に神に愛されている存在であり、救いへの希望の内にある存在である。彼女の描く人間たちが、たとえば、ハイニの叔父のように悪人と思われるような人であっても、良心の呵責に否応なく苛まれ、その点で基本的には良心を持ち、結果的に善良であるのは、ル・フォール自身の持つそのような人間観によるものである。

## むすびに

稲垣氏によれば、現代カトリシズムの固有の使命と存在理由は「超越を証言し、弁証すること」である。そして、それは人間が自己の存在の根拠をもとめて、自己の存在の最も奥深いところに立ち帰り、そこに創られた者としての徴しを読み取ることができるという能力、超越への能力をもつことによって、達成されるという。すなわち、人間は全自然界のうちで唯一、創造主を離れては虚無であることを知っている存在である。そしてその能力によって創造主に向かおうとする。この能力がトマス・アクィナスの言うところの「無限への能力」であり、そこに人間の偉大さと尊厳と栄光が存在すると氏は主張する。他方、超越を否定

する唯物論、観念論、進化論、自然主義などの立場では、人間は神を否定して、自らを宇宙の中心であると自負し、自然界を征服しようとする。しかし、氏によれば、宇宙の空間や時間の広がりには比べれば、人間は一瞬のまたたきのようなものであり、そしてやがて忘れ去られてしまう存在にすぎない。(稲垣 2,3)

ル・フォールの登場人物たちのうち、このような明白な意識を持って人間の存在の根底についての考慮をしているのは、科学者や教授、高位聖職者などの知的階級の人々のほんの一握りである。たいていの人々は、ただ理解不能の不幸に遭遇し苦しむのみであり、その意味の重要性を、最初からあるいは早くから理解する人は主人公以外はいない。そのような何もわからない多くの人々に、主人公は彼らの遭遇する不幸と苦しみの意味を自らの行動によって表現し、理解させるために存在する。先述のヴェローニカ、ブランシュ、バルビー、ハイニ、アラベラなどがそうである。彼らは、その行動や態度によって人々に苦悩の意味するところを示唆している。したがって、ル・フォールの主人公たちは稲垣氏の言うところの超越の弁証、すなわち人々に「神の存在を証言し、それを目に見えるように明らかにさせ、そして神の現存を理解させる」という目的のために存在しているといっているであろう。このことは宗教的離反が著しい現代のキリスト教が置かれている状況を考慮すれば、最重要の神学的課題であろう。

稲垣氏によれば、中世においては、神の存在は自明のことであり、その神の言葉を信じ、それを理解することが神学の目指すところであった。そしてこの世の存在が神の否定につながらない道を探ることが大切な課題であった。それを解決したのは、「すべてのものは神によって在る」という答えであった。それはすべてのものに神が内在することを意味し、つきつめれば、中世においてはどのようにして神はその超越性を失わずに世界に内在できるかとい

うことが大きな問題であった。しかし現代においては問題は逆であり、神の現存と人間の超越への必然性を立証しなければならなくなっている。すなわち、現代では自明なのはこの世界であって、説明や証明が必要なのは神の存在である。どのようにして超越的な神の存在を立証するか、つまりは超越的な神を肯定する必然性を示すことができるか、ということが現代のカトリック思想家の課題なのである。言いかえると、人間は自分の力によってこの地上に築き上げるものに最終的な希望をかけることができず、人間の使命は地上的なもの、時間的なものにつけるのではなく、究極的には永遠なるものによって意味を与えられざるを得ないこと、それを示すことが現代のカトリック思想家の課題なのである。(稲垣 6) ル・フォールの作品の語り手たちの「人間の力だけでは充分ではない」という言葉は、まさに、この課題を人々に突きつけたものといえるだろう。彼女の作品の登場人物たちは全員、戦乱や革命による不幸や苦難を通じて、自分の力によって誰をも救うことができない人間存在の卑小さと悲惨さに、いやおうなく気付かざるを得なくなる。彼らの苦悩の姿は、実は読者にとっても、作品という鏡を通して見せられた自分の存在の様相でもある。読者たちにもまた、自らの存在の根源をふりかえることが求められているのである。

神の現存を立証するために、現代のカトリック思想家たちはニュアンスに多少の違いはあっても、人間の生命がそこに集約されているような経験に目を向け、その意味や根拠を探ることを通じて、神に行き着くという手法を執っていると稲垣氏は述べている。(稲垣 6) ル・フォールもまた作品において、古えのアウグスティヌスがその著書『告白録』において「あなたはわたくしたちをあなたにむけて創られたので、わたくしたちの心はあなたのうちに憩うまでは安らぎを知りません」<sup>16)</sup>

16) Augustini Confessioum libri III (宮谷宣史訳)：告白録(上)、アウグスティヌス著作集第5巻1、(教文館)1993。

(Confessioum, 第1巻・第1章, 20) と述べた言葉を根拠に, 他の何物によっても和らげられない人間の渴望, 不満, 不安に目を向け, それを作品において描き, 神の現存を人々に告知しようとしたと思われる。そこでは自己の希望を達成し, 実現することは, 神へ向かって超越しようとすることを意味している。ル・フォールの創作した主人公たち, ブランシュやバルビーや, ヴェローニカなどは, このような人間の渴望を最も純粹かつ先鋭に具現化した人物である。彼らはそれゆえ, 多少の時間はかかっても, あるいは最初からその使命を悟り, 一直線に神に向かい, 人々に神の存在を立証する役目を果たさねばならないのである。この論稿で扱っている不信仰な登場人物たちは, その意味では, 彼らに依存し彼らに導かれて自分の存在の根源に目を向け, 理解にいたる普通一般の人間たちである。

彼らに向かってル・フォールが主張したいことは, 端的に言えば, 神の救いへの希望を棄ててはならないということである。そしてそのためには, 神の意志を体現する教会の人々への対応が大切であることを主張する。その対応とは, 具体的には, 不信仰者や教会の敵に対しても, 常に寛容な, 愛に満ちた態度をとり, 神の愛の意志を彼らの目から見てもわかりやすく体現することである。

『天国の門』のなかで, 枢機卿の姪ディアーナは信仰を失ったが, それでも最後の最後まで何とか信仰を取り戻したいという思いを抱いている。彼女は愛する恩師を教会が赦してさえくれれば, 自分も信仰を取り戻すであろうと, 一縷の望みを教会の象徴である枢機卿に託して, 敵を抱き寄せる愛こそがキリスト教の教会のとるべき態度ではないのかと, 必死に訴えている。

この彼女の救いを求める最後の願いに対して, 枢機卿は「教会は, ... 裁く時でさえ愛しているのだよ。しかし, 教会を裁く権限はお前にはないのだ」(TH422) と答えて, 彼女と彼女の恩師を赦そうと

はしなかった。このために, 遂に彼女は信仰回復の道に至るすべての望みを断たれて, 教会に別れを告げたのである。

「おお, それなら, 私はあなた方から解放されることを喜びます! 本当に, あなた方も同じ目にお会いになる日がやがてくるでしょう。あなた方が滅ぼす同じ科学が, いつかあなた方を滅ぼすでしょう」。(TH422)

彼女が言ったこの言葉通り, 近代科学精神の象徴である若いドイツ人科学者は, 教会からは遥かに離反してしまっただのである。これを回復するには教会の側からの, 人々に対する不断の愛の呼びかけが不可欠であることをル・フォールは主張しているのではないだろうか。不信仰者はこのとき, 教会の現実の姿を写し出す鏡であろう。

おわり

#### 引用文献の表示について

この論稿本文で用いた引用文献は次のように略して表示した。また引用箇所は本文中に, 引用文献略語の後に, 引用箇所を挙げ, 頁はアラビア数字で, (引用文献, 引用箇所, 頁) または (引用文献, 頁) のように表記した。

- 1) LS: Gertrud von le Fort: Die Letzte am Schafott, in: *Die Erzählungen*, (Insel Verlag, Ehrenwirth Verlag) 1966.
- 2) AJ: Gertrud von le Fort: Die Abberufung der Jungfrau von Barby, in: *Ibid.*
- 3) SV: Gertrud von le Fort: *Das Schweißtuch der Veronika*, München (Ehrenwirth Verlag) 1967.
- 4) DU: Gertrud von le Fort: Die Unschuldigen, in: *Die Erzählungen*, (Insel Verlag, Ehrenwirth Verlag) 1966.
- 5) TH: Gertrud von le Fort: Am Tor des Himmels, in: *Ibid.*
- 6) PU: Gertrud von le Fort: Plus ultra, in: *Ibid.*
- 7) D: Gertrud von le Fort: *Der Dom*, München (Ehrenwirth Verlag) 1968.
- 8) 稲垣: 稲垣良典: 現代カトリシズムの思想, (岩波新書 781) 1971.



- 9) WG: Gertrud von le Fort: *Woran ich glaube und andere Aufsätze*, (Verlag Die Arche) 1968.
- 10) 公文書：公会議解説叢書7，南山大学監修『公会議公文書全集』別巻，(中央出版社) 昭和44年.
- 11) Confessioum: アウグスティヌス (宮谷宣史訳)：告白録 (上), 『アウグスティヌス著作集』第5巻1 (教文館) 1993.
- 13) Maria Eschbach: *Die Bedeutung Gertrud von le Forts in unserer Zeit*, Westfalen (Verlag J.Schnellsche Buchhandlung <C.Leopold - Warendorf>).
- 14) Gisbert Kranz: *Gertrud von le Fort Leben und Werk in Daten, Bildern und Zeugnissen*, (Insel Verlag) 1976.

#### 参考文献 (引用文献以外)

- 1) 『聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき』共同訳聖書実行委員会 (日本聖書協会) 1994.
- 2) 小田垣雅也：キリスト教の歴史 (講談社学術文庫 1178) 2005.
- 3) M. シュミット (小林謙一訳)：ドイツ敬虔主義 (教文館) 1992.
- 4) アビラの聖テレサ (高橋テレサ訳)：神の憐れみの人生 (上・下), 鈴木宣明監修 (聖母の騎士社) 2006.
- 5) 十字架の聖ヨハネ (東京女子カルメル会訳)：霊の賛歌 (ドン・ボスコ社) 1989.
- 6) エルンスト・トレルチ (安酸敏眞訳)：信仰論 (教文館) 1997.
- 7) ヨーロッパ・キリスト教史 VI 現代 (中央出版社) 昭和46年.
- 8) F. W. ヴェンツラッフ=エッゲベルト (横山滋訳)：ドイツ神秘主義 (国文社) 昭和54年.
- 9) 須沢かおり：エディット・シュタイン 愛と真理の炎 (新世社) 1993.
- 10) M. グラープマン (下宮守之・藤代幸一訳)：カトリック神学史 (創造社) 昭和46年.
- 11) 林健太郎：ワイマル共和国 (中公新書 27) 昭和46年.
- 12) *Dichtung ist eine Form der Liebe Begegnung mit Gertrud von le Fort und ihrem Werk. Zum 100. Geburtstag am 11. Oktober, 1976*, Hrsg. von Hedwig Bach, München (Ehrenwirth) 1976.